
パンダヒーロー（

白紙描写

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

パンダヒーロー（

【ZPDF】

Z2631BA

【作者名】

白紙描写

【あらすじ】

パンダヒーローの曲を聞いて何となく、書いてみました。

アキラクオリティ（

パンダのヒーローは、何色でしょうか？

疑問を唱えるのがズレているようだが、そもそも、僕はあくまで、空想論理や哲学を圧縮して収縮して考え出された

一つの確信だと、思われるのですよ。

日付は、3月6日。

アキラが初めてパンダヒーローに、出合つた。日です。

場所は、球場。

球場と言つても、もう使われていない。雑草達が元気に生い茂る…
観るに觀枯れるとつもない風景だった。

誰のモノなのか知らない自転車と家で作つた麦茶をペットボトルに詰めた些細な飲料で、樽のグラウンドとやらに向かつたのだアキラ。

噂を聞けば、都市伝説だつて、心靈スポットだつて、一人で飛び込んでしまうアキラ的好奇心は、鉄筋コンクリートよりも筋金入りで、気になつた出来事、気になつた事件は、分かるまで調べるというのが彼の特徴ともいえる。

つまり、アキラは馬鹿。

自転車を立ち漕ぎして、河川敷のグラウンドへ。

空はいっぱいの青空と、こまめに散りばめられた白い雲たちとが、究極の爽快さを演出させていた。

「はあーはあー」

坂道でも、下り坂でもない扁平な道のりは、加速とも減速とも言えないスピードで駆けめぐつていた。

おかしな話。アキラは、汗水絶やした後の麦茶が飲みたかったのだ。
何故、自転車をこぎながら、麦茶を飲まなかつて？

飲めないからに決まつてます。

不器用で変人扱いされていて、クラスでは上位の浮遊力を誇り、：
文字通り浮いていて友達も指折りの数しか、手に入れていないアキラは、

自転車をこぎながら、ペットボトル蓋も開けることが出来ないので
す。

自転車のフロント部分に取り付けて在るカゴは、：カゴの中で、ペ
ットボトルがダンシングしている有様なのです。

手に終えないと。

息も切らしているため、完全にお飲み物は、運動の後と言つことにな
る。

「麦茶！ああアアああああああー」

雄叫びにも似た罵声と奇声を混同させ、蒼き大空へと投げ捨てた。

次へ

アキラクオリティ）（後書き）

アキラクオリティとは、単なるアキラと言つ名前を主人公にした。
それです。

川は、ドブ川。

対岸からここまで、結構な距離があり、その距離が川幅に繋がる。

普通、ドブとは、汚らしいイメージしかないがアキラは違った認識で感じ取っていた。

汚い場所は美化できる。

この発想は昔ながら、言われてきた先人の発見だ。単に、汚らしい場所に綺麗な花を置くと綺麗に見える。引き立てるスペースなのだ。

アキラは、そこを過つた解釈と展開で、汚い場所に真実があるとか、思っちゃってるみたい。キレイな物は真実で、汚らしい物は嘘と噂。

どの感じも口つて漢字が混入しているので、言葉も嫌いです。結局たどり着く答えは、人は嫌いです。

アキラは、かなりの距離を自転車で推し進め、あのグラウンドへとたどり着く。

「来てやつたぞ。グラウンドに……」

自転車を放り投げて、

言い捨てるも、このグラウンド来たのは、これで二度目だ。

「この畠葉は挨拶ですよ。

それで、

「一度田の景色は…、ゴリ？ 畑？」

田に映つた。球場には

「ゴリ」と「ゴリ」とが、生い茂る雑草と散乱している」とだけが。確認できる有様になつていた。

「ずいぶん変わったものだな。…あ、また、麦茶！」

放り捨てた自転車がガタリと倒れ、

麦茶だけが

傾斜に吸い込まれる。

「ゴロゴロ
ガタリガタッ

バックネットの後ろ側まで、転がつた。

「取るの、めんどくわこ。後にしよつ」

とか、言つて、コンクリ製の階段をつたい。グラウンドの土に足をやる。

粗大ゴミが部活動をやっていた。

一言言おう。電化製品しかない。
何故だろ? 分からない。

分かるすべもない。

けれど、近くに下水道処理場が在るのだけは分かる。

一度目の時、初めてここに訪れたとき、指折りの友達と鬼ごっこをしていた。覚えている。

その鬼ごっこの中に、寄りかかったポンプをアキラはしつかり覚えている。

ポンプとは、言わないのかもしれないのだが、大きな大きなエンジン音は耳に残っている。

知的な友達が、下水道処理場へ繋がっているんだとか、言い出したら、間違いないはずだ。

けど、二度目のグラウンドには、エンジン音すらも聞こえない。ただの「ゴミ」の溜まり場になっていただけだった。

「相当変わったな。見違えるくらいに…」

次へ

パツパバラパツパバラパー

近くを通っていた焼き芋自動販売自動車が音をたてた。

ここを通る頻度は、余程の物で、一日十回以上は通るのであるひつ回数を回数する。

だから、パンダヒーローに逢つたのは、麦茶を手にとって、のどを潤し、何となく、ヌルくなつた麦茶を冷蔵庫に貯蔵しようと思つた頃合いだつた。

勿論、その送電線が蜘蛛の子にまき散らされた、空は、まだまだ青空をさしていた。

つまり、時間はとてもゆとりがあつて、パンダヒーローさんが現れるのも、いかほどかと思えた。

何かしらの、トリガーがあつて、まだ、条件を満たしていないのだとするのなら、条件を探すに徹したことはないんだけれども、何もしなくとも現れそうな…そんな気がした。

風は川沿いに従つて、穏やかに流れている。アキラは、知るよしも無かつたが水底は腐つたボールで埋め尽くされている。

観ればシユールなのが、川全体が濁つているので、底すら観ることも出来ないので。

「冷蔵庫…あつた」

言いつとおりに、冷蔵庫はあつた。在りはする、しかしけれどもひつしても、動いてなどいない。ただのガラクタだ。

貯蔵庫としてなら使えそつだけど、アキラは、別に麦茶の入った容器を保存したいわけではないので、その冷蔵庫に触れないようにしたが、ついつい触ってしまったのだ。

手が触れると、何か、物凄い、威圧感、憎悪が指先から頭のてっぺんまで伝いわたつた。様な感じがした。

冷蔵庫、開けても何もないか、ゴミがあるかのどちらかだから、何の期待もしていなかつた。

開けてみて分かる。

「あ…」

パンダヒーローさんが冷蔵庫にいるのが確認できた。

パンダヒーローさんは体育座りでこいつを見ている、…皿の下にクマがあつて、寝ていないのかなーって思つていたけど、実際は、パンダだった。

黒い黒い、模様が目の下に大きくある。

パンダヒーローを確認して直後、何をしていいのか、思い浮かばず、すかさず。

「麦茶飲みますか？」

と訪ねてみただけだった。訪ねることしかできなかつた。

「パンダヒーローさんは何者なんでしょう？」

なぜこいつもあつさりと、目の前に現れるのでしょうか？

「パンダヒーローさんは、男ですか？ 女ですか？」

風が醜聞のように、運ぶ腐敗のにおい。よくよく観てみると、冷凍庫部分の下の引き戸から、人の指が顔を出していた。

アキラすかさず、満足そうにないパンダヒーローさんの顔みて、

「人、…食べるんですか？」

指を下の戸棚の冷凍庫に、指し示しながら、一方的にまた、訊いてみた。

次へ

パンダヒーローさんは、茶色い地味なズボンを着てて、赤茶けた生地に縁の口ケのマークが使用されたマントを履いていました。

腐ったパンダです。

小学生が着てこいそうなTシャツ。トレンドマークはサングラスのパンダ。白地です。

「パンダヒーローさん、会いたかったんですよ？」本当に…

無言のパンダヒーローは、一昨日の方向を向いている。何処か遠目で、空を観てている有様だ。
何か、腹でも空いているのかな？…と、アキラは思つも、人間なんて率いれていません。

食材などは、どうで調達しているのだろう…とかも思つ。

「パンダヒーローとは、誰だ？」

えつ、驚かされました。

今の台詞は、パンダヒーローさんその物の声です。透き通るよつて耳に伝わったから、一瞬、この敷地の所有者が現れたのかと思つてらいにびっくりしました。

「パンダヒーローさん…ですよね？」

「オレは、パンダヒーローではないぞ。」

「勘違い…ですかね？　パンダヒー…」

そういう欠けた、その時です。

「パンダヒーローです。嘘ついてました。」

丁寧に、答えて見せたパンダヒーローさん。

「…けれど、パンダヒーローなんて、長ったらしいから、『ぱだひる』と呼んでくれよ」

この人本物なのでしょうか？

嘘かもしませんね。本物だったのなら、そんなノリで、自分の名前を省略するはずがありませんから…

「ぱだひる…さんで、よろしいのですか？　自分が言うのも、失礼なのですが…少し考えて、名前を改めた方が宜しいのではありますか？」

麦茶を動き出したパンダヒーローに、渡した。やつはなく、手渡すアキラ。

特にそんな様子もなく、一度田は、パンダヒーローも手に取った。

「… そなのが？」

パンダヒーロー、訊いてくる。

「やつですよ。誇らしこな前、変えたり、省略するのはいけません」

パンダに、その名前の意味を優しく教えてあげた。

「誇らしこな前?、意味が分からぬ。オレの名前なんて何だつて良いだろ? 名前なんて、只の記号」

よつと、とパンダヒーローは冷蔵庫から飛び出して、血に着地する。ぱたり

その反動でぐらつく、冷蔵庫を背後に、パンダは麦茶を飲んだ。間接するペットボトルの飲み口。アキラはなんだか、見とれてしまった。

それだけ、魅力を持つていることになる。パンダヒーローには、

「名前は、大切ですよ?」

ああ、大切。

「本当にか? 本当に大切か? 嘘付け。」

パンダヒーロー格好イイ。惚れたよ。マジ惚れた。

「じゃあ、自分、一方的にパンダヒーローって言わせていただきますね?」

アキラの日課は決まつたようです。

パンダヒーローさんに、毎日会つひとつ、呪くすひとつ、

「えつ、」

「えつじゅ、有りません。」

パンダヒーローは、驚いた表情と反比例して、地面に突き刺さつて
いた金属バットを握った。

「仕方ないか、お前の顔を観ると、しうがない気持ちにさせる。
…バ、パンダヒーローでいいぜ」

はにかみながら、承諾を肯定してくれた。顔はよく見えないけど、
照れくさそうな感じがする。

「それで、自分は、パンダヒーローさんの生け贋でいいです。」

この場合は、取つて食われるのかもしないけど、生け贋は良い意味で、友達とも呼べる。

上下関係を決めるのは、一番早く友達になれるからだ。アキラの長年
の経験が熟知したともいえる技術だ。

「生け贋は、酷いことを言つな。自分が嫌いなのかよ、土でも食つ
てるよ」

馴れ馴れしいのか、人思いなのか、掴めない人。あの時のボケ様は
何だったのか…

次へ

「パンダヒーローさん、地味ですね。」

絵画の位置が瞬く間に、ひやがつている。市?

このグラウンドには、四カ所の出入口があつて、絵画が転がつていた。

マウンドの近くに、密集して粗大ゴミが五大湖のように、たゞまつている有様が伺えた。周りには、雑草が取り囲む。

まるで秘密基地感覚な、人気のなさ。いかに、此処が呪われているが分かる…第六感。

ピーターパンみたいなパンダヒーローは、横になつて全自動じゃない奴の洗濯機の上で、片足立てて、注射器をペン回ししていた。

クルクル

アキラが明らかに喧嘩的暴言をいつていてるがしかし、パンダヒーローは見向きもしませんでした。

「ダーツ遣つてる、どけ」

パンダヒーローは、片手を閉じて、アキラの背後の絵画を狙いつていた。

別に、僕の背後の絵画を狙わなくてもいいのに…と思つたけど、GUMIの声帯が実感は言つた発声で言われると、これはもう、毒しかないと思つた。ので、どいた。

「パンダヒーローさん、二層ドラム式洗濯機がぐらついていますよ
？ 大丈夫ですか？」

二層ドラム式洗濯機とは、言わないかと思われる四角い箱の下には、（ほうし）の手とサードベースが、微妙なバランス感覚を定か待つていた。

これは、ぐらついても仕方ない歯周病と同じだ。

「おつと、ぐらつく…」

「だつたら、パ…」
「んなわけ、あるか！」

木つ端微塵に起こられた。

今日はまだ始まつたばかりな為、二時を過ぎる鐘が鳴つたばかりだつた。

あいにく、パンダヒーローさんは、アキラをアキラだと認識してくれない様子を空中分解しているようだった。

空は、ゴムゴムの網のように、張り巡らされた送電線。よく見ると、送電線と送電線の間に、ポワイトな野球ボールが引っかかっていた。

「よつー。」

しゅばば
じやれ

いい感じに、絵画の女性の額に突き刺さった。狙うところが、テロで在るところがパンダヒーローらしい。

「おい、アキラ。頭に変なの突き刺さつた、頭の角度がおかしい。」
「のような目を持った少女をおまえは知らないか？」

いきなりだつたため、目がかゆくなつた。…さて、そのようなグロテスクな少女をアキラは知つてゐるよしもないのだ。

誰でしょう？

あの冷凍庫の引き戸から飛び出していた指の人でしょうか？
完全に引き出してみたら、中身は分かるかもしませんが、生きていはないと思う。

「知りません。パンダヒーローさんが食したのではありますか？」

パンダヒーローに舌葉を弾き返した。

「オレは、人を食べないし、何も食べない。昔… アンドロイドと踊つたこと会つたから、その時、食欲消失したんだろう。恐らく…」

アンドロイドとは、何か… ホムンクルスの様なピクルス的存在か？
地味で重要。

今のパンダヒーローさんは、ピクルス以下の地味で格好良い。ハリポテさん。

「ああ、話が変わったが、ほんとに、少女の事知らないのか？」
前

「知りませんよ。自分、友達指折りだし、そんなマニアックな人間
関係構築していないし、何より、パンダヒーローさんの友達なんて
知らない。初耳です」

友達と表したが、次の言葉がその言葉の無責任さを彩っていた。

「すまんが、それ、おれの妹なんんですけど、」

「汗、妹の名前ぐらい覚えてくださいよ！ 特徴で覚えるな！」

怒鳴ってしまった。

次へ

「パンダヒーローさんの妹とは、あの冷凍庫の引き出しに、飛び出した死体じゃないんですか？」

応える質問。

「あの引き出しの中を覗いたのか？　プライバシーの侵害だな…おまえ」

パンダヒーローも応える。

黙るパンダヒーローさんは、少し考えるそぶりをしてから、ふと、媚びを売る様に…飛び跳ねた。

「え、おい、あの中には人が居たのかよ、早く言えよ。そんな大事なことは！」

はじめ最初にあつた時に、指を指して示したはずなのに、覚えていないとおっしゃる、パンダヒーロー。

「せつかも、人間ですか？　て聞いたじゃないですか？　覚えていないと、言ひづ。パンダヒーローさんが頭が悪い」

パンダヒーローは、洗濯機から飛んで、地面に着地を試みる志が觀て取れた。

パンダヒーローさんは、ブランコを揺らして、遠心力を利用して飛

ぶ子供のように、今、飛んだ。

空中滞空時間は、数秒ほどで、人間許容範囲内運動神経をしていたと、みた感じの感想を述べてみる。

スダ

無事無傷で着地した。

「頭が悪いのは、自覚しているつもりだが、記憶力までアホにされると、重度だな、覚えてない物は覚えてないから仕方ないけど…」

提案しようか…風に乗せて、

「ん、あ、そうだ、だったら、確かめれば良いのでは?」

「お前、俺の確信を盗み見層だから、…な。本当にあれだけは、誰にも見せたくない隠し物が潜んでいるんだ。確かめるのなら…お前は此処で、帰つて貰う。」

難しい条件をみすぼらすんですね。

アキラに、居場所探らして、こざと黙つと、帰れだなんて、良い使い駒になつたようです。

「自分も、パンダヒーローの羞恥心に迫りたいです。保証します。絶対に誰にも言ひません。あの収納スペースには何が隠されているんですか?」

と、当て付ける。

「バカ言えよ。また、たまに変な来客が現れたな -と思つたら。これだから困る。あの物の重大責任性に何も気づいたやいないな。帰れよ。一度と麦茶持つてくるな！」

怒つた。

その後の言葉を勝手に妄想させて、頂きますと、『麦茶うまくては、美味しくて、また来いよ！』と言わざる終えないから、失せろ』だ。

麦茶の勝利です。アキラは負けたのです。

いや、

「待つてください。パンダヒーローさん。自分は、あなたのためには全力で麦茶を入れてきますので、お願ひしますから、どうにか、羞恥心の確信だけでも…」

麦茶で餌付けなんて、笑いそう。

「……う、…………わかつた…………」

分かつたみたいだった。

冷凍庫の下の収納スペースに実際に妹が居るのか、確かめるために、二足歩行した。

次へ

軽くパンダヒーローは、素晴らしい。

自販機に、缶を補充するお仕事をやつしてたパンダヒーローは、誤つて、缶を地面に落としてしまいました。

缶は凄惨にも形が変形して、中身が吹き出していました。
仕方なく、パンダヒーローは今装填したばかりのお飲み物を、同じ落としたのと統合された缶を買い。
のち、無事な缶を箱に収めた。

吹き出る缶を口で押されて、液体を飲み込んだ。
ワイルドな一面を魅せるパンダヒーローでした。

これは、アキラの妄想で実在するパンダヒーローさんは、愚かしい哀れな小羊みたいだつたようです。

「こんな話をしようじゃないか、一いつ

ポツケに手を入れ、ゆっくり前を歩きながら、顔だけアキラをみて、
そう言うパンダヒーロー。

「話とはなんですか？」

素直に聞いてみると、パンダヒーローさんからの言葉は、個人的に缶ジユースの主成分より気になる。個人的。

「話とは、話だ。通りかかる車のタイヤが止まつて見えるとか、逆

回転して見えるとか、言い出す奴がいて…当時の俺は、『人喰いパンダと踊るノーバディー』と名だけが街々に浸透して、いつてた、俺らにな。『君たちには中身がない』と極力真顔で言われたんだ

凄く脳压の高い話がポロリと出てきた。でも、アキラはめげずに、聴き届けた。

「そこで、踊るノーバディーは聴いたんだ。そのタイヤを見る人に…『あたしは、中身は在りませんが、心はあります。でも、パンダさんは、あたしのように中身が無いわけではありません。心は在りませんが…』と言っていたんだ。…意味分かるか？」

「わか…ります。つまり、ノーバディーさんは、物理的に空で、パンダさんは、心がからだつた。結論から言って、ノーバディーさんはその言葉を否定してはいなかつたとなるのですね？」

「いや、これは巧妙に仕組まれたテロリズムだつたんだ。正解はそれだ。」

「テロ？」

「おれは、人を捕食して、人の心も体も全部吸収できたんだ。その行為 자체は、化け物で人で在らんと言える、けど、心はしつかりあつたんだぜ」

またしても、頭痛が歌う設定が脳内をクルクルさせる。

そんな設定で大丈夫なはずはない。けど、仕方なく受け入れよう…

「…内側から攻めたのってこと?」

「その通り、ご明察、バグハグ大王もその手でミクを陥れて、仲間をズタズタに引き裂いたんだってはなしだ…」

「その後、ノーバディーさんは仲間割れでどうなった…の？」

「食べた」

「その性質が働いたとかで、食うことやめたとか？」

「心も中も分かった」

すごい話でした、これが本当なら、僕は評価します。

「イヤを見る人は、その後、見回りは？」

「あ…」

繋がつたらしい。空気が変わったのが分かる。

錆び付いたATMのすぐ側には、パンダヒーローさんが、入つていた冷蔵庫がその場に君臨していた。

次へ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2631ba/>

パンダヒーロー（

2012年1月13日18時48分発行